

逃 避

理三甲一 林 幸 二 郎

夏の休みになつて東京の學校から歸省してもう四日になるのに、妹の朝子は一度も親しく打ちとけて話しかけず、又視線すらも向けて來ないのを彰は淋しく感じ始めて、未だ朝子の心が昔の儘なのだなと思ふと少々嫌な氣持ちがしないでもなかつた。東京から歸宅した日、朝子にと東京で丸一日探してやつと見付けた素晴らしいブツクエンドを

「これ朝子へのお土産」

といつてさし出した折も、朝子はちつとそれを眺めてゐて手を出さうともしないので

「こんなの嫌ひなのかい」

と彰が朝子の顔をのぞきこむと、そのまますつと立つて自分の部屋へ去つて行つた。それに又昨日は昨日で朝子の友達が二三人遊びに來てゐたので

「いらつしやう」

と明るい楽しい氣持で入つて行くと、友達は皆坐りを正してびよこんとお辭儀をした。

「お兄さんでせう」

と朝子に一人が尋ねても朝子はだまつて本の頁をめくつてゐた。彰はいろ／＼面白い話をして、高等學校の時のアルバムなども出して皆と一緒にその一枚一枚に大笑ひをしてゐる時でも、朝子は時折横目で眺める丸けで一言も話し出さな

かつた。

こんな事を思ひ出しながら彰は郷しい、そしてあるうすらぎむい感じで寢床から出て來た。硝子戸を元氣よく開くと朝の爽やかな空気がさつと吹いて來て、彰の小さな感傷を吹きとばすやうに、髪のををさら〜と音立てゝ行つた。夏だ。雲の切れ目から夏の太陽が眩く輝いて庭の木々の緑を照らし、路一つ向ふの木立からすつと公園の中の芝生の上、そしてその向ふの眞青な池の面、その上に浮んでゐる眞白に塗られたポスト、池に續く川に架けられた眼鏡型の橋などがこの夏の太陽の光を吸ひ込んでゐる。山の上あたりには澄み透つた青い空が明るく光つてゐる。(さうだ。旅に出よう。家を離れよう) 彰の心には山の彼方の美はしい國が湧き上つて來て矢庭にたまらなくなつて旅仕度にかゝつた。一つはこの素晴らしい自然の中に全身をぶつつけて行きたい衝動に驅られたのであり又他方には朝子から——従つて家庭から離れたいといふ逃避の念に驅りたてられたからである。然しこれら二つは彰の場合に於ては結局同じ事になるのだつた。妹朝子の家庭内に於ける排他的は傾向は彰の家庭内の生活から息詰らせ、やがては彰をして自然の中にとびこませる決心をさせたのであつた。然し彰のかうした決心といふものが全面的に朝子の兄に對する愛情の欠陥の爲に起る彰の朝子への無情といつたものの現れでは決してなかつた——朝子への嫌惡の情が彰の心の中に少しでも現はれてゐたのでは決してなかつた。いや、朝子に對する烈々たる情愛の發露に外ならなかつたのであらう。彰はその日母親に言つた。「しばらくの間、旅に出て考へてみたいと思ひます。母さんにはわかつていたゞけると思ふのですけど、私はこの家庭を愛してゐます。母さんのやうにいゝ女むすめはありません。でも私は旅に出て見たいのです。家を離れつゞけてゐる私が久し振りに歸つて來てみたとき、妹の感情が私にはます〜はつきりわかつて來たのです。朝子は僕を嫌つてゐるのではないんです。兄として尊敬してゐるのです。でも朝子はそれがわかつてないんです。自分の本當の心がわかつてないんです。母さんは僕達兄妹の氣まづい交りをどんなにつらくお考へでせう。だから僕にはたゞこの夏休みの間中どこか外で暮してゆつくり考へてみたいのです。朝子も考へてくれるでせう。本當の朝子自身の心の中を見出すまで歸つて來な

いつもりです。僕は朝子を幸福にしてやりたいのです。朝子を朗らかな性質に素直な気持ちにさせたいのです」

「行つてらつしやい。朝子は私が幸福にさせます。朝子がお前を他人のやうに考へてゐるのも無理はありません。お前のお父さんがなくなる時も、私に子供の事はよくよく頼むといつて死んで行かれました。だけどそれは私にとつてむづかしい事だつたのです。朝子はお前を心の中から嫌ひに思つてゐます。お前を邪魔者にすら思つてゐるんですから」

「お母さん、それはちがひます。朝子の本當の心は僕を兄貴と思つて尊敬してゐるんです。でもその心がしつかりとは把握出来かねてゐるんです」

「朝子の事なら私の方がよくわかつてゐます。お前は折角の夏休みに氣まづい思ひをせず旅行に行つてくる方がよいでせう」

「母さん、僕は朝子が好きなんです。可愛いくてたまらないんです。どんなに朝子がよそ／＼しい態度をとつても僕は常に愛してゐます。愛しつゞける事も出来ると思ひます。ね、お母さん」

「え、母さんにはそれもよくわかつてゐます。少くとも外見だけはお前が朝子を愛してゐるのがよくわかります」

かう言ふと母親は眼をつぶつてもう何も話してくるなといふやうに坐りなほした。彰は急に、この母親に對して何かしら途方もない悪いことを言はせたやうに思へて來て、何か言はうとしたが急には言葉が口に浮んで來なかつた。

「お父さんのお墓参りにも行つて來ます」

と言つて彰は立上りそつと二階へ上つて行つた。母親はぢつとその足音を耳で送ると、ふら／＼と朝子の部屋へ入つて行つた。朝早く友達の家へ遊びに行つた朝子のとりみだした机の前に坐りこむとしばらくぢつとその机の上を見つめてゐたが

「朝子、お前は本當に可哀さうだね。あんないゝ兄さんを持つてゐるのに何故親しく出來ないんだね。自分一人で惱んでゐるがこの母さんにはよくわかるのに、私はお前が可哀さうでならない」

とひとりごとを繰返してゐた。女學校への赤いカバンが母親の眼にちか／＼としみ込んで何時しか涙ぐんで來るのだつた。

彰を乗せた汽車は夏の高原に向つて進んで行つた。

やがて靜かな高原の小さな村を流れてゐる川に面した宿屋に落着いた彰の心の中にわだかまつてゐた鬱憤は暑さの爲にますます昂じて來るのだつたが、その日の夕方になると周圍も幾分か涼氣が立ちこめて來て、夕食後ぶらりと川沿ひに散歩に出る頃は相當滞在出來るなといふ自信が着いて來た。彰は何よりも自然が好きだつた。自然の環境にしつくりと融け込んだゆつたりした氣分になつて行くのをしみ／＼と味つた。川の岸に腰を下して、繁みを見つめてゐる彰の足許からすつと光を放つて螢がとび上つた。水面に映つたその光を見てゐると、繁みのあちこちに飛び交ふ螢の光に氣づいて、急に涙もろくなつた彰は、邊りが全く暮れて暗くなつてしまふまでその岸に腰を下してゐた。山の稜線もしるく日がくれるとさすがに高原だけに、浴衣の裾からさつと冷い靈氣が入つて來て、ふと我に歸つた彰は急いで宿に歸つて來た。机に向ふと遠くまで汽車の車輪の音がかすかに響いて來て旅上第一夜にたまらない郷愁の念に驅られて來た。蚊やりに火をつけ、バツクから原稿用紙をとり出すと、家の方へ心誘かれる思ひをしながら、その淋しさを文字として書きなぐつた。

今もつて淋しい氣持だ。お前は どうして俺に親しくして呉れなかつたのだらうか。勿論、俺とお前とは母を異にしてゐる。俺の母は俺を産むとすぐ他界してしまはれた。その時、父は未だ若かつたし、赤ん坊の俺が居たので、今の母つまりお前の母を迎へたのだ。お前と俺とは四つきり歳の差はない。そして實の兄妹なのだ。だのにお前は何時も俺の眼から逃げて行く卑怯な態度をとつた。そして白い眼で俺を見返してゐた。家庭の外では明るく楽しく過してゐるお前

が家に歸ると冷い空氣に觸れるやうによそ／＼しい態度をとつてゐた。それはお前自身の氣持ちが反映して家庭が冷く感じたのかも知れない。今の母もそれを非常に心配してゐたし父は勿論の事だつた。朝子、お前はどうして俺にも少し甘えてくれなかつたのか。どうして俺を本當の兄貴として親しくしてくれなかつたのか。でも俺にはその氣持ちはよくわかるやうな氣がする。お前は俺が嫌ひではないのだ。本當は好きなんだね。然し俺はもつと妹として、甘えかゝつて來てほしかつた。

父を責める事は出來ない。が二度目の妻を迎へるといふ事が、子供達の感情をこれ程迄に疎にし、家庭の空氣をこれ程迄に冷くするのだつたら、それはやはり悪いことかも知れない。けれど父もそしてお前の母もお前を非常に愛してゐた。それにもまして兄の俺はお前を愛してゐたのだ。可哀さうでならないのだ。何時かはお前の心も素直に暖くなる日が來るだらうと思つて、俺はたゞ手を擴げてお前がとびついて來るのを待つてゐたのだ。この兄のお前に對する燃えるやうな意志と愛情とを持つて。

父が死んで行かれる時、お前の事を非常に心配なさつてゐた。あれでは朝子が可哀さうだなあとつぶやかれるのを聞いた時は兄の俺も涙が出て仕様がなかつた。父がなくなつてからは俺が戸主としてこの家を見て行かなければならなくなつたが、それは俺にとつては非常に心苦しい重荷となつた。實の母でない今の母とそしてお前とを見て行かねばならないことは、俺にとつてはまるで他人の家に長男として入つて行つたのと全く同じだつた。萬事が窮屈だつたし氣まづい事が多かつた。けれど俺は今の母を全く實の母と同じやうに愛しつゞけた。たゞお前だけがこの兄を何時も冷く見てゐるのが實につらい事だつた。根が素直で純な氣持ちであるだけに、お前が母を異にする兄に心から甘えて行き、親しんで行くことの出來ない惱みを持つやうになつたのは俺によく分ることなのだ。ただこの兄に心から接觸して行くだけの度量や氣力がなかつたが爲に、結局は俺から避け、ひいては排斥し邪魔者のやうに考へ出したにすぎない事も俺にはよく理解出來る事なのだ。そしてその素直な氣持、純な氣持を濁らせ曲げることが最も恐ろしいことであり最も悪いこ

ことであるのも知つてゐた。もし俺がお前をそのやうにさせたら、なくなられた父に對して何とお詫びが出来よう。又今母に何と申譯が立たう。俺には到底そんな事は出来るものではなかつた。

俺はお前を愛するが故に、お前の惱みがよくわかつてゐたが爲に、そして又本當の妹だと信じたが爲に、しばしばひどいことも言つたし相當きついことも命令しなければならなかつた。お前はその時はよく俺の言ひつけや命令を守つてくれた。時々俺は他人に向つて物を言ふやうにお前に對して口を開いたことがあつた。そんな時はすぐ後で實の妹ぢやないか、妹に向つて何故こんな兄らしくもないことを口にしたのかと自責の念に驅られて、朝子すまなかつたと心の中で叫ぶ事があつた。けれどその時ですらお前は何ら口答へもせず、他人から物言はれたかのやうに聞き流してくれた。

そして靜かに俺の前から避けて行くのだつた。然し、朝子、實際その時くらい淋しい、寒々しい感に襲はれた事はなかつた。何故俺に逆らつて來なかつたのか。何故俺に向つて來てくれなかつたか。お前が俺の妹であるならば何故もつゝ俺に逆らひ反抗して來なかつたのか。お前がぢつと俺の顔をみつめ、そつと去つて行く時は飛んで行つて、思ひきり擲つてやりたかつた。思ひきり抱きしめてやりたかつた。さうすればよかつたのかも知れない。お前もさうして貰ひたかつたのかも知れない。が今の母が何一つ俺に口を出して意見をしようともなさらなかつたその胸の中を考へるとたまらない氣持ちになつた。お前が俺の前で小さくなつて行くとき、お前の産みの親として今の母はいろ／＼言ひたい事が多かつただらう。お前の爲に俺に澤山の言ひ分はあつただらう。けれど俺が先妻の子であるといふ爲、一言も口に出さず胸にしまつておかれた母の胸の裡を考へると俺はもうたまらい程くるしい。お前さへ俺に血の通つた本當の妹として、妹の愛を以て甘えかゝり、とび込んで來てくれたら、母がどんなにか安心し悦んでくれただらうと、それだけが残念でたまらない。性や性格などを育て導いてくれる家庭がもし冷く感ぜられる場合はその人にとつてそれ以上の不幸はなくその人をして應々誤つた道に走らせる最も大きな原因となるものである。けれども、その家庭の暖さを感じず、その人自らがその暖さ愛情などを斥け冷く接し、その爲に家庭の中に暗い冷い空氣を漲らせるならば、その人自身は勿論不

幸であるが、それにもましてその家庭を不幸に陥れ、家庭の破滅を來すものである。そしてその罪は全くその人自身にあると言はねばならない。朝子の場合、今の母は勿論實の娘として深くお前を愛してゐる。俺もお前の惱みのよりよき理解者としてお前を非常に愛してゐる。それがお前にわからない筈はないのだ。お前がたゞ感傷に走りすぎ、一時の感情に負けて家庭の愛情を斥ける時は、母に對しても非常に悪い罪惡を犯してゐることになるのだ。

こゝまで彰が筆を進めて來ると、旅に出る前に母と交した會話の際の淋しさうな母の姿が目に見えて來た。(お母さん、すみません。親不孝者のこの私をどんなに心の中でおしかりでしたせう) 彰はすぐ布團にもぐり込んで急に泣けて來た。汽車の汽笛が遠くの方から聞えて來た。小さな聲で「朝子、朝子」とつぶやいてみた。むし暑くなつて來たと思つたら外に雨が降りだしたらしく、パラ／＼と屋根を打つ音が聞え始めた。

翌朝、雨の音に眼が覺めた彰は、枕許の煙草を口にくはへて火をつけ、朝の宿の部屋に紫の煙をくゆらした。起き上つて封筒の表に家の宛名を書き、朝子様と書き了ると昨夜書いた原稿用紙を再び讀みかへす氣もせず、そのまゝ丸めて封筒に押し込んだ。朝食をすます頃は、雨もすつと小降りになり、夏とは思へぬ程涼しくなつたので彰は高下駄を借りて手紙を手にして外に出た。山の麓に立ちこめた雨霧が次第に晴れ上り始める頃の眺めは、高原ならではの景色だつた。さつと霧がはれて思はぬところから山の頂きが現はれて見えたりして、傘に當る雨の音もさはやかに彰は町の方へ道をとつた。赤いポストの前に來ると封筒をとり出して宛名をぢつと見てゐたが二三歩そこから歩きすぎて出したものかどうかしばらく逡巡した。朝子がこの手紙を受取つたらどういふ結果になるのだらうと、昨夜は考へても見なかつたこんな事まで思ひ煩ひ始め、やゝともすると彰の決心はにぶり勝ちになるのだつた。乗合自動車がとばかりを立てながら彰の横で急カーブをとつて村の方へ走つて行つた。臭いガソリンの臭ひが雨にたゞかれながら彰の周りをたてこめてゐるが、今通つて行つた自動車の轍を見つめてゐると自然家の事を思ひ浮べて來るのだつた。母と朝子の二人の生

活、夏の休みで歸つて來た自分。きまづい數日、二階から見た公園の夏の朝景色、旅への思慕、そして昨夜この高原に來て感じた旅愁。彰に急がせるやうにひどい雨がさあつと降つて來て、赤いポストの庇が物待ち顔に霽を落してゐる。彰は思ひきつてその封筒をポストに放り込んだ。重いボトンといふ音が中から聞えて來ると急にとりかへしのつかぬ事をしてしまつたといふある呵責の念に襲はれ、ポストと並んで雨に打たれてゐるのが何だか悪い事をした場所に何時迄も居る時のやうに恐ろしくも感じられて來て、ポストの方を振り返りもせず雨道を何處となしに歩き出した。到頭ポストに入れてしまつた。もうすぐ集配人が來てあの手紙を持つて行くだらう。昨夜自分ほどどんな事を書いたのだつたかしらん、さうさう、俺は朝子が好きだと書いた。朝子を實の妹として愛してゐると書いた。これは本當だ。俺は妹を愛してゐる。そしてその故に東京で一日をつぶして朝子へのお土産にとブックエンドを買つて來た。然し果して眞實のところ朝子への愛情の爲だけで買つたのだつたらうか。若しかしたら自分の父の後妻への、そしてその子供へのお義理といふものの爲に仕方なく買つたのではなかつたらうか。實の母でない母に對する自分としての責任をのがれる爲に買ひ求めて來たのではなかつたらうか。少くともそんな感情があつた時少しでも起つたのではなかつたらうか。いや、そんな筈はない。絶対にその様な氣持はなかつた。その證據にあの日一日中、三越、白木屋、松阪屋、伊東屋と足を棒にして探したではなかつたか。そして友人が旅行をさそつてくれたのに、一日でも早く妹を喜ばせてやらうと飛んで歸つた來たのではないか。本當に心から愛して居ればこそだ。さうすれば何故朝子は俺のこの氣持ちが解つてくれぬのだらう。やはり俺の心の隅には朝子は異母妹だとの考へが潜んでゐたのだらうか。そして朝子にはそれがわかつてゐたのだらうか。違ふ。俺はいつも朝子を眞の妹と思つてゐる。そして今の母を實母と慕つてゐる。俺が悪いのだらうか。間違つてゐるのだらうか。そんな筈はない。今出した手紙はもうすぐ朝子の手許に配達される。妹は何と思ふかしらん。笑ふだらうか。いや。怒るだらうか。いや。泣いてくれるだらうか。朝子は俺の心がわかつてくれるだらうか。……彰はとめどもなく雨の中を苦しみながら歩きまはつた。雨は益々ひどくなつて晝間なのにもう夕方のやうな暗さに

なり、路をたゞきつける雨は容赦なく泥を彰の着物の裾にはねつける。山は全く雨でかくれて邊りに人影一つ見えな
い。彰は急に寒氣を催ほして來て宿へ急いだ。

宿に歸つて見ると少し風邪を引いたらしく、熱が出てすぐ床を敷いて貰つて寢た。前の川に水が増えたらしく屋根う
つ雨音に交つて流れの音が聞えて來る。

「明日のことを思ひ煩ふな。明日は明日自ら思ひ煩はん。一日の苦勞は一日にて足れり」
聖書の中の文句を思ひ出して、彰は雨の音を聞きながら眠りに入つた。

雨は四五日つゞいて降つた。彰もすつと風邪氣味で床に入つたまゝすごした。雨の音を寢床で聞いてゐるうちに、彰
は靜かに自分を反省してみた。もしかしたら自分で一番悪いことをしてゐるのではなからうか。自分が悪い、間違つた
事をやつてゐて氣づかず、そして他人が皆不幸になつてゐるとすればそれこそとりかへしのつかない事だ。父が死なれ
てからは戸主になつたとは云へ、繼母に育てられ、父の残して行つた財産で東京の學校へまで行かせて貰つてゐる自
分。今の母にとつて血のつながりのない自分。妹の朝子から充分に理解されないで居る自分。かう云つたものが皆一つ
になつて寢床に寢てゐる彰にのしかゝつて來た。若し今の状態から彰自身が居なくなつたら？ 自分が家庭から飛び出
したら？ こゝ迄彰が考へて來るともう決心は早かつた。學校を止めよう。働くんだ。實社會にぶちあたるんだ。でも
學校を今やめるのは心残りがあつた。あと二年で卒業なのだ。今の學校さへ卒業すれば——然し彰はすべてを放棄して
北京の友人に働きたいといふ手紙を書いた。

雨があがると彰は故郷の父の墓へ向つた。昔よく遊びに來たことのある故郷の輕便鐵道の停車場に何年ぶりかで下り
立つと、鯛がやかましく鳴いてゐるなつかしい篠の森への田舎道を、つま先上りに歩いて行つた。幼い頃育つた故郷の
田畑や山や川が、彰の心を生きく——と蘇らせ、田舎の人々の顔には知つた人は居なかつたが皆に親しみが持て來た。
相當な坂になつて、後をふり向くと鐵道線路の向ふ側に思ひ出もなつかしい彰の生れた城下町が見渡された。驛からす

つと眞直ぐに走つてゐる路がお城のお濠の横を通つて垣々と續いてゐる。お壕端の柳の木や僅かに残つてゐる城の石垣、城内に建てられた中學校の校舎、お城をとり圍んで藁屋根や瓦屋根の家々。

「昔のまゝだ」

彰はしばらく眺めてゐた。山の中腹からぢめ／＼した路へそれると昔と變らぬ小川が清い水を流してゐた。思はず手をその水の中に入れて故郷に觸れ、故郷の臭ひを嗅ぎ味を味はつた。

父と母の眠つてゐる墓はそこから近かつた。暑い日中にも拘らずそこは大樹に圍まれて暗く冷え／＼としてゐた。途中で採つて來た野花を墓の前の竹筒に挿して

「お父さん、お母さん、彰が唯今歸つて來ました」

と小さな聲で言つた。そのまゝ彰は何時までもしやがんでゐたが何時しか涙が浮んで來てゐた。お父さん、お母さん。本當に久し振りですね。彰は今日まで元氣でした。でも淋しくてなりませんでした。たつた一人私を残して行つてしまはれたんですもの。お父さん、でも御安心下さい、今の母は私にとても親切ですから、朝子も本當によい妹です。可愛い妹です。お母さん、彰にはお母さんの事は何にもわかりません、私がこんなに大きくなつたのを見て下さい。お母さんが生きて居て下さつたら——でも今の母はいゝ母です。私を學校にやつてくれてゐますし私を可愛がつて下さいます。それにつけてもお母さんに會ひたくてなりません。何故あんなに早くおなくなりになつたのでせう。時々悲しくなります。たまらなく淋しくなる時があります。

彰はもう泣きくづれてしまつた。彰の頭に木の間洩る薄陽がさして美しく靜かに日が暮れ始めた。墓の周圍を掃除して別れを告げ山を下りる頃は、空は夕焼けで眞赤だつた。篠の葉の先々が赤く染つてかすかにふるへてゐるやうに思へて、彰は家に歸らうと足を速めた。

彰の誕生日のお祝いを母と朝子と三人で佛壇に灯りをつけてさゝやかに開いた。もう八月も終りに近く、秩の虫が庭の隅でやかましい程だった。彰が幼い頃からのアルバムを出して来て楽しさうに一枚一枚を眺めてゐるのを見ると、朝子は彰の横に坐つて一緒に眺めてゐたが

「誕生日は人々を若がへらせるんだね。この寫眞一枚一枚が皆蘇へつて来るやうに思へて仕方がない」

と彰が云ひながら、なくなつた父と一緒に親子四人で撮した寫眞をぢつとみつめてゐた時、朝子は、お兄さんほんとに私が悪かつたんですと心の中に叫んでゐた。旅行先から遣した彰の手紙を讀んでから朝子は彰の自分に對するこんな今まで大きな愛情に打たれたことはなかつた。急に彰が可愛さうになつて、そのまゝ彰の方へ倚りかゝつて行きたいやうな衝動に驅られて来た。寫眞を見てゐる兄の横顔は電燈の灯にまぶしくらゐる尊く見えた。男らしい太い眉毛が朝子の涙をさそつて、知らぬうちに眼に一ばい涙が浮んでゐた。

「お兄さま、何時までも／＼私の側から離れないで下さい。今度始めてお兄さまの愛情が身にしみてわかりました。朝子を許して下さいませうか。屹度／＼朝子は立派な妹になつてみせますよ」

朝子は心の中で叫びつゞけた。心なしが彰の顔に安堵と喜びの光がさしたやうに思へてはつと胸に来るものがあつた。

彰はアルバムを見てしまふと、側に片手をついてぢつと眼に涙を溜めて坐つてゐる朝子を靜かに眺めた。

「朝子、兄さんは今度北京で仕事が見つかつたんだ。大いに働いて来るつもりだ」

朝子には何も聞えなかつた。たゞ彰の唇が動いたのだけが眼にうつつた。

「兄さんは東京の學校をよして働く。北京の友達の手紙を出してゐたら一昨日返事ですぐ来いと言つて来たんだ。

朝子は喜んで兄さんを送つてくれるだらうね」

「北京？ 學校をよすんですつて？」

朝子は涙を呑み込むと兄の兩膝に手をつけて兄の顔をのぞき込んだ。

「朝子、未だお母さんには云つてないのだけど、兄さんにとつてこれが一番よい方法だと決心したんだ」

「兄さん、嘘よ、嘘よ」

「兄さんとしてもお母さんやお前と別れるのはつらい、けれどお前のことや家の事を考へるとどうでもかうしなければならなくなつたのさ」

朝子には何の事かさつぱりわからなかつた。やつと彰の眞の心が擱めたと思つたら急にこんな事を云ひ出す兄の心に驚きと共にある近づき難い高さを見出した。朝子は髪の毛もふり亂して兄にすがつた。

「ね、お兄さま……、私が悪かつたのです。朝子は馬鹿でした。兄さんがそんな遠い所へ行つてしまはれたら母さんはどうなるのです。朝子とたつた二人きりにしてお兄さまは行かれるんですか、死なれたお父さまが何とおつしやるでせう。兄さん、思ひ止まつて下さい」

彰にはお父さんといふ言葉を聞いてはつとして、まじ／＼と朝子の顔を眺めた。さうだ、俺と朝子は父は同じなのだ。夏お祭りしたお墓に眠つて居られる父なのだ。彰は朝子の兩手を握りしめて

「朝子、泣かないで、兄さんの折角の決心が……」

「お兄さま……」

「朝子、俺は母の爲にもお前のためにもかうすることが一番よい事だと思つてたんだ。きつとお父さんも喜んで下さると思ふ。お前も喜んで送つてくれ」

「兄さん、母さんや私の爲に逃げるのね、卑怯だね、昔の朝子だつたら喜んでせうけど、もう今の朝子はそんな……」
彰は立上つた。

「お兄さま……」

朝子は彰の手を握つて放さない。父と同じにする兄と妹が、父によつて結ばれた太き情愛の絲は、切れんとしてもつれ、彰の決心はともすれば沼に引き込まれんとするのだつた。

朝子の部屋に入ると机の上に彰の買つて來た土産のブックエンドが立てゝあつた。彰は急に立ち止つて

「朝子、來年女學校を卒業したら、東京の女學校へ行つて一生懸命に勉強してくるんだぞ。兄さんは北京で働く、そしてお父さんを本當に喜ばせてあげるつもりだ。さ、約束しよう」

朝子は疊の上に泣き伏した。可憐な姿に彰の決心は次第ににぶつて來るのだつたが、彰の眼は輝き、彰の手の中には北京行の赤色の三等切符が握られてゐた。